

第6章 指導技術を高めよう

1 指導計画の作成

指導計画は、教育課程を具体化したもので、保育を実施するための具体的な計画である。

「3つの資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭におきながら、幼児にとってふさわしい生活が展開されるように作成することが大切である。

指導計画には、長期の計画（年・学期・月）と短期の計画（週・日）がある。

(1) 指導計画作成の留意点

下のように指導計画は、つながりをもって作成される。園の教育方針に目を向け、園全体での共通理解が大切である。

○長期の指導計画

＜年間指導計画＞前年度の反省を考慮した上で、園全体で作成



＜月案＞先月までの幼児の姿や年間指導計画と照らし合わせて、学年ごとに作成



○短期の指導計画

＜週案＞学年間で共通理解しながら、学級と照らし合わせて、学年で作成



＜日案＞学級の実態を把握し作成

ア 長期の指導計画の視点

(ア) 幼児の姿を見通す

心や体の発達の状況、生活の中での自立の構え、教師や友達との関わり方、幼児を取り巻く環境への関わり方、ものの見方・感じ方・捉え方、言葉の発達の状況、表現への

意欲など、累積された記録や資料をもとに作成する。

(イ) 具体的なねらいや内容を設定する

教育課程に沿って、幼児の生活を予測し、その時期に育てたい心情・意欲・態度などを明確にする。

幼児の実態を見ながら、それぞれの発達のねらいを達成するために、経験する必要がある内容を設定していく。

特に5歳児の指導計画では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において、小学校教育との円滑な接続が図れるように、ねらいや内容を充実させる。

(ウ) 環境構成を考える

- a 幼児の発達の過程を踏まえる。
- b 幼児の生活の流れを見通す。
- c 幼児の興味や関心を受けとめて構成する。
- d その時期の自然や社会の事象の特徴を生かす。
- e 生活の中の出来事や文化などに会えるようにする。

イ 短期の指導計画の視点

- (ア) 長期の指導計画のねらいと幼児の興味や関心、発達等の実態を捉え、週のねらいを設定する。
- (イ) 幼児の生活の流れやリズム、環境構成等柔軟に計画する。
- (ウ) 園全体で話し合い、学級の実態把握に努める。
- (エ) 週のねらいを達成するためには、具体的にどのような経験が必要かを考える。
- (オ) 週の生活の流れが幼児の興味・関心を踏まえ、個と集団、動と静などのバランスを工夫する。
- (カ) 幼児を取り巻く環境をどのように設定したらよいのかを考える。
- (キ) 幼児の生活を見直し、家庭との連携や地域社会との関わりを考慮

する。

- (ク) 教師の指導、援助が、一人一人の幼児に応じたものとなるように配慮する。

2 指導計画の立て方

(1) 短期指導計画の必要性

日々の保育の充実を図るために必要となるのが、短期指導計画の週案と日案である。この2つの指導計画には、次のようなよい点がある。

- ア 曜日と結びついて週の見通しがつき、指導内容の調和を図りやすい。(偏りのない保育)
- イ 何日間か引き続いて行う事項の指導過程がつかみやすく、その指導をしやすい。(見通しを持った長期的展開や保育)
- ウ 遊戯室や園庭など共同で使用する施設や設備の使用割り当てが、はっきりし、混乱なく使用できる。(計画的な施設利用)
- エ 年齢や教育経験の同じ組が2組以上ある場合、進度をそろえやすい。(学年ごとの育ちの共通理解に立った保育)

(2) 日案の重要性

週案と日案は、それぞれの特徴がある。

週案は、見通しがつくが、具体性に乏しく、保育を進める上では不十分である。

日案は、細かい指導については留意できるが、一連の流れの中での保育が見えにくい面がある。

週案・日案の両長所を生かした指導計画を立てたいものである。ここでは日案について示す。

ア 日案

幼児の成長、発達、は、一日の生活

の中で、どのような経験をし、どのような援助をするかによって左右される。これらをどのように行うか計画を立てることが、日案の最も重要な部分といえる。

(ア) 例1

幼児の遊び(活動)が盛り上がり、教師の予定した活動ができない場合

- a 思い切って、幼児の遊びを中断させる。(後日できることを伝える)
- b そのまま遊びを見守る。(教師の予定した活動は後日にまわす)

(イ) 例2

興味を持った遊びが盛り上がらない場合

- a 他の興味のある遊びを取り入れる。(他の方法で工夫する・視聴覚機器などを用いる)
- b 遊びが盛り上がるまで支援する。

(ウ) 例3

全く遊びに興味・関心の持てない場合

- a その子が、何に興味があるのか探る。
- b 教師から声をかけて誘い出す。

日々の保育は、教師と幼児の関わり合いで成り立っているので、計画と実際の指導のずれが生じることが予想される。教師が、予想していた動きに必ずしも幼児が参加するとは限らない。大切なのは、事前の計画に固執せず、幼児の姿に応じた柔軟な援助をすることである。

次の2つの例は、どちらも教師の指導が行き過ぎ、うまくいかなかったケースである。

(ア) 例1

日案どおりに保育を型にはめてしまい、幼児の興味・関心・活動の状況を見失い、一方的な保育展

開になってしまった。

(イ) 例2

幼児の自主性にまかせ過ぎ、大幅に指導計画を変更してしまった。

また、日案を変更しなければならぬ例としては、次のような2つの場合がある。

(ア) 例1

予定していた活動に対する幼児の興味や関心が著しく減少したり他へ転じてしまったりした場合

- a 縄跳びをしていたところ、隣のボール遊びに興味をひかれた様子をみて、ボール遊びを経験させることの方が適切と判断した。

(イ) 例2

急にまれな自然現象が起こり、そのことに気付かせたい場合

- a 空に虹がかかった。
b にわか雨が降り始めた。
c 保育室にスズメが入ってきた。
d 天気が急変した。
e 突発的な自然災害等により、機器が故障してしまった。

イ 日案にそった指導をするときの留意点

- (ア) それぞれの活動が、一日の生活の中でどのような位置を占めているのか。

- (イ) それぞれの活動が、どのような性質をもっているのか。

- (ウ) それぞれの活動が、どのような役割を果たしているのか。

これらを踏まえた上で、活動と休息など、一日の生活のリズムを構成する要素で、一つ一つの活動を捉え、それぞれの活動の特性と、他の活動との関係・関連を知り、それらを生かす展開をする。

また、活動のどこに重点をおくかを捉えることも大切である。そして、幼児を指導する際、第一に考えなけ

ればならないのは、その活動を経験した幼児が、満足感・達成感・充実感を味わえるかどうかである。

例えば、サッカーに興味をもっている幼児に対しては、次のようなことが考えられる。

- (ア) 思う存分取り組んで欲しいので、毎日サッカーを続けるようにする。

- (イ) サッカーもよいが、他の遊びの良さにも気付いて欲しいので、違う遊びを経験できるようにする。

どちらにしても幼児の様子を見極めて指導することが大切である。教師の心構えとしては、好きなこと、得意なことに十分取り組ませることも大切であるが、「先生と一緒に新しいことをした」「理解できた（分かった）」「問題が解決できた」「できなかったことが、できるようになった」という、今まで知らなかった世界へ導くことも大切である。個々の幼児が満足感や達成感・充実感を味わい、発達に必要な体験が得られるようにすることが重要なポイントである。

ウ 適切な援助の仕方

保育をする上で、教師は個々の幼児の活動や集団遊びが、深まったり広がったりするように、必要な助言や指示をする。

【観察】 幼児を見守る

【承認】 できたこと、頑張ったことを認める

【共感】 うれしさや喜び、達成感などを共感する

【応援】 意欲や自信をもたせ元気づける

【発想】 更に活動が発展する示唆をする

【援助】 援助し活動に取り組みやすくする

幼児が、活動に無理なく取り組むためには、以上のような援助を幼児

の様子や活動の取組などから判断して行うことが大切である。

しかし、幼児が援助に頼らず自ら活動できることが、満足感や達成感・充実感の面からも望ましいので、助言や指示は最小限にとどめ、簡潔に明確に伝える工夫も大切である。

エ 日案の反省と評価の仕方

(ア) 反省や評価の振り返り

日案の反省は、日々の幼児の変容や指導についての評価をし、幼児が、よりよい成長・発達を遂げるための資料となる。また、日案の記録に基づいて、教育課程や年間指導計画・月案を改善するため、反省・評価は、次の指導への出発点になる。幼児が、よりよく成長するためには、日々の反省・評価をもとに、改善を図っていくことが大切である。

(イ) 反省や評価の留意点

指導の反省、評価については、記憶が鮮明なうちに行う。なぜなら、翌日の日案を作成するときの参考資料として、細部にわたり一つ一つの具体的な反省ができるからである。

また評価は、客観的に行う。教師のその時々感情によって左右される評価をしたのでは、望ましい幼児の成長を妨げることにもなる。従って、「どこが、どのように良かったのか」など、具体的な評価の対象や観点を明らかにしておくことや、他の教師の意見を参考にしたり、文献を読んだりすることが大切である。

(ウ) 反省や評価をするにあたっての着眼点

【時間】

活動と比較しながら相互に捉える

- (例)
- ・それぞれの活動についての時間配分は、適切であったか
 - ・一日全体の流れを見た時に、活動の時間が不足していなかったか
 - ・時間があまって、活動を追加することはなかったか

【ねらい】

ねらいに沿った指導・評価の観点を具体的に捉える。

- (例)
- ・ねらいは幼児の実態に合っていたか
 - ・活動に対してのねらいが適切で教師が身に付けさせたいことが幼児の姿となって現れたか

【教材や教具】

種類・数・配置など、活動に対しての環境設定が、適切であったかを捉える。

【評価】

それぞれの活動の経過、一日の流れの中における活動の配列の仕方や展開を具体的に捉える。

- (例)
- ・それぞれの活動の展開において、指導形態は適切だったか
(学級 グループ 個人)
 - ・一日の流れからみて主な活動の位置付けは適切だったか

【計画】

保育実践を行った上で、日案のねらいが達成できたか、そのねらいは中期、長期的にみてふさわしかったか、などを捉える。

日案の評価は、一人一人の幼児のその日の取り組み方や、学級全体の活動への参加態度や取り組み方など、個人の視点と全体の視点、両面から行くと、さらに把握しやすく、次の活動へのステップとなる。

オ 評価の記録

評価の記録は、日々の指導をよりよくするためのものなので、ねらいに沿ってどのような内容を記述するかを考えて記録する。また、評価については園内研修等、園全体で組織的、計画的に取り組むことが大切である。

日々の記録やエピソード、写真等、参考になる情報を生かしながら評価を行ったり、複数の教師で考えを話し

合ったりしながら、より多面的に幼児を捉える工夫をする。

(3) 先輩の保育実践記録は園の財産として受け継ごう

大部分の園には先輩が、園設立の精神や教育目標を具体化するために着々と実践してきた貴重な足跡が、記録として残されている。それは園の貴重な財産として、今日に受け継がれている。それらの教育実践記録を、折にふれて参考にしよう。また、自らも、あとに続く人たちに参考資料として提供できるような教育と、その実践記録を残すことを心掛けよう。

3 観察と記録の仕方

(1) 観察と記録の方法について

幼児を理解し、適切に指導をするためには、日々の観察と記録が大切である。観察と記録には、いろいろな方法がある。目的に合わせた方法を選ぶことや、いくつかの方法を併用したり、工夫したりすることも大切である。

記載しやすく、長続きする仕方で記録を取り続け、自分にあった方法を確立しよう。

〈例1〉逸話記録法（エピソード記録法）

- ・ 幼児の行動が可視化され、幼児に対しての教師の関わり方が分かる。
- ・ 発達や育ちの面からは捉えにくい。
- ・ すべての出来事を記載するのは困難である。

○月○日（○曜日）天気（○○）
母と離れられず、登園から泣いていたA児。ずっと担任にくっついてしたが、絵本を見て「この本、持ってるよ。」と言って本を広げ、話を始める。B児、C児も寄ってきた。話を聞き一緒にうなずいたり笑ったりする。
その後、C児が「外へ行こうよ。」と言うと、3人で出ていく。

〈例2〉週案・日案記録法

- ・ ねらいや教師が予想していたことに合わせながら書くことができる。
- ・ 人数が多いクラスは、一人一人について書くにはスペースが足りない。

〈例3〉名簿形式記録法（個人票、座席表）

- ・ 一人一人について書くことができる。
- ・ 普段見落としがちな幼児についても記録ができる。
- ・ 全員について書く場合、時間がかかる。
- ・ 個人の発達や育ち、友達関係については分かりにくい。

A児	(例) 元気に登園、昨日の続きの廃材製作に取り組む。空箱を使い、ロボットを完成させる。工夫して腕が動くように、D児に相談して始める。
B児	(例) 少し眠そう。身支度がゆっくりしている。途中で座り込んでしまった。

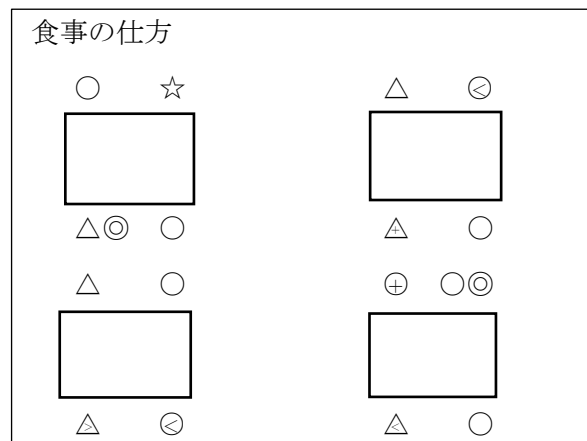
〈例4〉チェックリスト記録法

- ・ 記録が敏速にできる。一目で理解できる。
- ・ 何か起きた時の状況が分かりにくい。

幼児の活動						
幼児名	A	B	C	D	E	F
ねらい						
固定遊具を使って遊ぶ	✓	✓		✓		
絵本を喜んで見る	✓		✓	✓	✓	✓
○20分間の観察 ✓印は、5分間継続を示す						

〈例5〉図示記録法

- ・図なので、誰にでも分かりやすい。
- ・友達との関わりがわかりやすい。
- ・その時の状況が分かりやすい。



- …女児 △…男児 ☆…教師
 <…姿勢よい >…姿勢悪い
 ◎…全部食べた +…残した

このように、いろいろ方法があるが、保育が終わった時、印象に残ったことを記録することが基本である。教師の心に残ったことは、幼児にとっても、重要な意味を持つことが多い。その時にどのように感じたか、どのようなやりとりをしたか、幼児の言葉や表情、教師の気持ちも含めて記録しておく。その記録から今日の保育の振り返りができ、幼児の育ちを理解することができる。

そのことから一人一人の幼児を大切にしたい明日の保育が生まれる。

(2) 観察・記録をする場合の留意点

ア 先入観を持たない

幼児は環境と関わりながら日々成長している。

教師は毎日幼児と接しているので、それぞれの性格や行動についてのイメージが固まってしまう、観察や記録をとるときに、つい「あの子是这样だ」「こういうときは、このようにやるだろう」という先入観が伴いがちにな

る。このように固定化した捉え方をしていると、幼児の変化や成長に気付かないことがあるので、一人一人の行動を先入観を持たずに捉えるようにすることが大切である。

イ 幼児の内面の気持ちを理解する

幼児は、自分の気持ちや友達との関係などに変化が起きると、普段と異なった行動をすることが多い。好きな友達と一緒にだといつもより活発な活動をしたり、自分の思いどおりにいかなかったために遊びをやめてしまったりするといった例は、よく見られることである。

表面に出てきた現象だけを観察して判断するのではなく、行動やその場における幼児の内面や心の動きまで、捉えることが大切である。

ウ 全体と、幼児一人一人からの両面から見る

全体を見てみると、活発に行動する幼児は目につきやすいが、おとなしい幼児はつい見落としがちである。これを補うためには、観察しやすい人数を決めて、順次観察していくのもよい方法である。例えば、

- ・今日○○遊びをしている3人のグループは、翌日はどんな遊びになっているのだろうか。
- ・気になるA児がいる5人のグループの活動について見てみよう。
- ・いつも1人で黙々と遊んでいるB児は、友達との関わりはあるのだろうかかなどである。幼児の活動や、一人一人に視点が置けるので、記録もしやすくなる。

クラス全体から見つめることと、一人一人に目を向けることの両面から観察するよう心掛けよう。

エ 全職員で情報交換をすること

観察、記録をする人数配分も考える必要がある。幼稚園においては、そ

の学級の担任が一人で観察し、記録することが多い。そのため、ややもすると主観的になりやすく、幼児のよさを見落としてしまうこともある。そこで、時間を決めて、全職員で全体の記録を取って話し合ったり、隣の担任と観察し合ったりするなど、多くの目で幼児を見る機会をつくるのもよい方法である。

4 指導要録の記載

(1) 「指導に関する記録」の基本的な考え方と記載の仕方

幼稚園幼児指導要録（幼保連携型認定こども園園児指導要録）は、その記載する事項に関して、国から示されている（平成30年4月様式変更）。その内容は、大きく二つに分けられ、「学籍に関する記録」と「指導に関する記録」となる。

「学籍に関する記録」は、外部に対する証明等に役立たせる原簿としての性格をもっており、原則として、入園時及び異動の生じたときに記載する。「指導に関する記録」は、1年間の指導の過程と成長の姿を要約し、次の年度の適切な指導に役立てるための資料としての性格をもっている。

なお、「特別支援学校幼稚部幼児指導要録に記載する事項」「幼保連携型認定こども園園児指導要録の改善及び認定こども園こども要録の作成等に関する留意事項等について」も示されている。〔取り扱い上の注意〕

指導要録の作成、送付及び保存については、学校教育法施行規則第24条及び第28条の規定に従わなければならない。また、指導要録の記載事項に基づいて外部への証明などを作成する場合には、慎重に対応し、園長の指示により、その目的に応じて必要な事項だけを証

明書に記載する。

また、個人情報の保護とともに、情報公開も要求される。指導要録については慎重な取扱いをする必要がある。

耐火金庫に収納し、厳重な保管に努め、外部への持ち出し等をしてはならない。

(2) 幼稚園幼児指導要録の性格を正しく理解しよう

「指導に関する記録」は、次の年度や就学後の適切な指導に資するための資料としての性格をもっている。従って、個々の幼児の活動をよく観察して、記録に留めておくことが大切である。

〔指導の重点等〕

勤務する幼稚園の教育課程に基づく学年の重点及び1年間の指導の過程において、当該幼児の指導について特に重視してきた点を記載する。

〔指導上参考となる事項〕

- ・ 1年間の指導の過程と幼児の発達の姿。
- ・ 次年度の指導に必要と考えられる配慮事項等。
- ・ 最終年度の記載に当たっては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（到達目標ではないことに留意）」を活用し、幼児に育まれている資質・能力や指導過程と育ちつつある姿。
- ・ 幼児の健康の状況等、指導上特に留意する必要がある場合等。

(3) 補助簿を作成し、客観的な評価を心掛けよう

指導要録は、学年末に記載するが、その時期になって記録の蓄積がないまま記載するとなれば、印象や記憶に頼ることになり、正確さを期すことが難しくなる。そのため、日ごろから個々の幼児についての記録が残されていることが必要である。これが「補助簿」といわ

れるものである。

この補助簿を、どのような内容で、どのくらいの単位で記録していくかについては、各幼稚園、教師によって決定される。普通のノートに気付いたことをメモするというように、形式や内容を定めないものが多いようである。園によっては、指導要録の記載事項について、資料が集めやすいように、観点を定めているところもある。要は、記録しやすく活用しやすいものであればよいのである。

次に、例を挙げる。

〔S児の記録 ― 補助簿 ―〕

— 1 学 期 —

- 積み木遊びや絵本を見るなど、静かな遊びが多い。戸外での遊びに誘い入れても、いつの間にか保育室へ。保育室が、S児の安定できる場所なのか。考えたり工夫したりすることが好きなのか。
- 遊びの中での会話が少ない。話しかけても言葉が返ってこない。しかし、U児とだけは例外。楽しそうに言葉を交している。
- S児の遊びを広げようと働きかけることが、マイナスになったかも知れない。教師が、うるさい存在と受けとめられたようだ。U児との二人の世界を楽しめるように、見守ることが必要ではないかと考える。

— 2 学 期 —

- U児を仲立ちにして、友達が増えてくる。友達と一緒に走り回ったり、戸外で運動したりするなど遊びが広がったが、U児が欠席すると、たちまち元気がなくなる。
- 友達と言葉を交す楽しさを味わっている姿が、見られるようになった。S児が遊びの中で、「できた。」と言ったことがきっかけだったようだ。「できた。できた。」と繰り返し笑い合っていた。

— 3 学 期 —

- 遊び仲間が増える。S児の発想や作るものが、魅力らしい。基地ごっこやサッカーなど、体を動かして楽しむ遊びに広がってきた。
- 口げんかが多くなる。理屈が通らないこともあるが、いろいろな場面で自己主張をしている。1学期の無口なS児とは見違えるような姿
- 2月中旬ぐらいから今日はこれをする、自分で目的を持ち、張り切って登園してくる姿が続く。友達と待ち合わせたり、ふざけ合ったり、一つの遊びを長時間楽しんだり、幼稚園での一日を思い切り楽しんでいる様子である。

「指導に関する記録」に記載したい内容

- ・年度当初と比べて、大きく成長したこと
- ・S児の良さ、伸びて欲しいところ
- ・指導に対する振り返りと、今後の指導の在り方

日常の保育の記録を生かして記載

- ・月や学期ごとの記録をまとめる
- ・一年の終わりに学期ごとのまとめを総括して、発達した姿を捉える

5 環境整備の仕方

(1) よい環境の中で、幼児の心身を発達させよう

幼児教育において最も大切なことは、適切に整えられた環境の中で幼児が生活を送ることである。

幼児と環境は、互いに働きかけたり関わったり合ったりしている。環境と一言で言っても、園庭・園舎などをどのように整備するか、教職員をどのように組織するかという園全体のことや、日々の保育に関わる学級内のことまで様々である。具体的には、

ア 遊具や用具

イ 自然環境、地域社会の環境、社会的な事象

ウ 保育の時間や空間

エ 友達や教師

オ 人的環境と物的環境との関係の中で醸し出される雰囲気

などがある。例えば、物的環境では、一つの部屋の遊具や用具を全部出した部屋では、幼児は何をしたいのか、分からなくなってしまうこともある。あれもしたい、これもしたい、友達がやっていることもしてみたいと、つまみ食いの遊びになってしまう。したいことや興味を持ったことに取り組み、満足いくまで遊ばせるためには、遊具や用具を、どう置くかだけではなく、いつ、どのくらいの量がよいのか、また、タイミング、質と量の関係を十分考えておかななくてはならない。

そして、幼児がしたいことに対して、どのくらいの時間をとったらよいのか考えることも大切である。

人的環境では、自分の気持ちを受けとめ、心を支えてくれる信頼できる教師、そして、一緒に遊び共感してくれる友達が、最良の環境といえる。幼児は、教師の姿勢や生活の仕方によっていろいろ学んでいくので、教師の役割は重要である。教師自

身が豊かな人間性を持ちたいものである。

このような環境への関わり方、取り組み方を十分に考慮し、幼児の実態にあった環境をつくっていくことが大切である。

(2) 清潔な環境を維持しよう

保育室を清潔に保つことは、衛生上必要なことである。

清掃は、毎日行う。清掃の仕方については、園の構造や床の材質などにより異なるので、その園の方法をよく聞いて行う。一般的に気を付けるべき点を挙げると次のようになる。

ア 床

幼児は、床に座って活動することが多いので、常に清潔になっているようにする。

イ 室内の隅

毎日清掃をしていても、ほこりがたまる。幼児の登園前、降園後は必ず清掃する。また、ままごとやブロックなどが置いてあるコーナーの隅などは、気に入ったブロックを隠したり、ごっこ遊びで寝転んだり、幼児が好む場所である。時々、大きな物を動かし、清掃しておくことが大切である。

ウ トイレ、手洗い場

幼児は、使い方に慣れていないため、汚してしまうことがある。排泄も重要な生活の一部なので、気持ちよく使用できるように清掃しておく必要がある。また、毎日の生活の中で繰り返し使い方を指導したり、汚さないように使う気持ちを育てたりすることも必要である。また、臭気がこもらないよう換気にも気を配る。

エ 動植物の飼育栽培

生き物の管理は、とても難しいものである。教師は、動植物の生態や飼い方なども習得しておく必要がある。動植物に初めて触れる幼児やアレルギーのある幼児もいるので、実情に応じた慎重な対応が必要である。

(3) 安全に留意して環境整備しよう

幼児は、活発に活動する一方、運動能力や注意力、判断力などが未発達である。そのため、よくけがをしてしまう。しかし、教師が気を付ければ未然に防ぐことのできるけがもある。

例えば、床に水がこぼれていたとする。幼児がすべって転ぶことが予想される。水をこぼしたら、すぐに拭き取れば未然に防げることである。日々の保育に追われていると、つい後回しにしてしまうことも多いので、十分気を付けたい。手洗い場が室内にある場合は、特に注意が必要である。床は、梅雨時など湿度の高い日など、水滴が発生するので注意する。

また、幼児が安心して遊べるよう、下記の定期的な点検も必要である。

〔点検項目例〕

- ア 画びょうは落ちていないか
- イ 大きな物（棚、オルガン、ピアノ、作品など）が、転倒しないようになっているか
- ウ 幼児が届く場所に釘などの突起物はないか
- エ カッターなど刃物は安全に保管されているか
- オ 遊具などの破損はないか
- カ 入口、通路などに物はないか（避難経路の確保はできているか）
- キ 救急箱の中はそろっているか
- ク 薬品などの置き場所は適切か
- ケ 園庭や砂場などに危険物は落ちていないか
- コ 固定遊具の周りに、水たまりはないか
常に幼児の安全に目を向けて、整備していくことが大切である。

安全点検表（例）

場 所	点 検 内 容	4 月	5 月
シ ー ソ ー	支え棒が腐朽していないか		
	持ち手が取れやすくなっていないか		
	クッションのタイヤが擦り減っていないか		
	支点のナットが、ゆるんでいないか		
ブ ラ ン コ	支え棒が腐朽していないか		
	押さえネジが、ゆるんだり抜けたりしていないか		
	チェーン・椅子が、いたんでいないか		
	着地点が、つまずきやすくなっていないか・すべりやすくなっていないか		
す べ り 台	支え棒が腐朽していないか		
	手すり・階段・踊り場は腐朽していないか		
	溶接部分は腐朽していないか		
	滑走面に変形・突起物はないか		
	着地点に危険物はないか		
砂 場	砂が柔らかくなっているか		
	石・ガラス・危険物が入っていないか		
	枠が園庭より高くなっていないか		
	日除け棚が腐朽していないか		
	柱のゆるみ・腐朽がないか		
	消毒		
園 庭	でこぼこがないか・つまずきやすくないか		
	石・ガラス等の危険物はないか		
	備え付け遊具は固定されているか		
	樹木が折れたり枯れたりしていないか		
	門扉・塀が倒れやすくなっていないか		
点 検 者 印			
園 長 印			

(4) 夢のある環境を作ろう

新しい環境で生活することは、誰でも緊張するものである。特に進級した幼児、入園直後の幼児は、不安でいっぱいである。まず教師が、笑顔で元気よく挨拶をしよう。幼児が安心して、園に来ることが楽しみになるようにするのは、とても大切なことである。そして、明るく落ち着いた雰囲気保育室に入り、遊びが始められるのが理想である。室内の雰囲気づくりを考えると、用具の種類、コーナーの内容、装飾など様々なものが思い浮かぶ。

しかし、たくさん飾りをつけたからといって、よい環境になるとは限らない。保育室は、幼児の生活の場なので、幼児の遊びに適したものや、教師の願いにそった環境構成を考えたい。

幼児と協力して作ったものや、幼児の作品を飾ることは、とてもよいことである。自分の製作したものが、身近に飾られた喜びを感じたり、友達の作品を見て、刺激を受けたりすることもある。

用具については、用意しておくばかりではなく、しまっておくことも必要である。足りないものに気づき、教師に言いに来たり、代わりのものを使って工夫したりする遊びも生まれる。

環境を構成するというと、すべて教師が準備するように思われがちであるが、幼児と一緒に環境に関わりながら、幼児の発想を受けとめ、共に作りあげていくことが大切である。また、空箱を利用した手づくりおもちゃなどは、既製品にはない温かさを感じる。日頃から、いろいろなことに挑戦し、教師自身のアイデアやセンスを磨いておくことも必要である。

(5) 指導計画に基づいて環境構成しよう

実際に環境を構成していく場合、何を用意すればよいか、何から整えていったらよいかは、教師の悩みの一つである。

そこで重要な意味を持つのが指導計画である。指導計画は、あくまで予定であるが、この計画を基に環境を考えていくと、

幼児の予想される活動にそった、用具や遊具が準備できる。

年間計画や行事などから、一年を通じて整備していくものや、日々の保育の中で必要なものなどを考えていくと、準備するものが分かり、早めに用意できる。急いで整備したものには、足りないものが出てきたり、使いづらかったりするので、余裕をもって準備したいものである。

また、初めて使用するものは、前もって自分自身で試したり、先輩に相談したりする。昨日の幼児の遊びや記録から、今日はどうのような活動が、どのように展開されるかを予想し、幼児の視点に立って環境を構成し、整備をしていくことが大切である。